

説一切有部の因縁論

——「四縁説」と「六因説」の成立に関連して——

兵藤 一夫

阿含やニカーヤの原始經典に説かれる「すべては因縁によって生じる」という縁起の思想は、一面では、アビダルマ仏教において因縁論(或いは因果論)として分析され展開されていく。その代表的なものとして、南伝の「二十四縁」や北伝の「四縁・六因」などの教説がある。そのうち、「四縁」と「六因」の両説は説一切有部(以下有部と略称)において発展したもので、有部の因縁論の中核をなしている。この二つはどちらも一切の存在に適用できる独立した教説となっているが、一方では互いに密接な関係(一種の補完関係)を有している。すなわち、四縁は「因縁」(hetu-pratyaya)・等無間縁(samanantara)・所縁縁(alambana)・増上縁(adhipati)であり、六因は相応因(samprayuktaka-hetu)・俱有因(sahabhū)・同類因(sabhāga)・遍行因(sarvairāga)・異熟因(vipāka)・能作因(karāna)であるが、そのうち、「因縁」は相応因乃至異熟因の五因に相当し、増上縁は能作因に相当する。『俱舍論』などによれば、有部はこの関係を基に、主として「六因説」によりながらも「四縁説」を巧みに併用して独自の因縁論を展開していく。

このような有部の因縁論を正しく理解するためには、「四縁説」と「六因説」のそれぞれについて、その基本的性格を理解しておく必要がある、そのためには、先ず、それら二つの成立過程を明ら

かにしておく必要がある。ところが、これまでの有部の因縁論の研究は、『俱舍論』などの完成した体系に基づいて、「六因」・「四縁」の内容を分析したり相互関係を検討するに止まり、その成立過程にまで目を向けて議論しているものは少ないように思われる。そこで、「四縁説」と「六因説」の成立過程を、現存の有部の論書の上にたどっておくことは意義のあることと思われる。

以上のような問題意識の下に、筆者は「四縁説」と「六因説」に関して、それぞれその成立過程の一端を論じたことがある。

- (1) 「四縁についての一考察」(印仏研31—2昭58)
- (2) 「六因説について——特にその成立に関して——」(大谷学報64—4昭60)
- (3) 「六因説について——特に「相応因」と「俱有因」について——」(印仏研33—2昭60)

拙論(1)は主に「四縁説」の成立に関したものであり、拙論(2)は「六因説」の成立に関したものである。拙論(3)は「六因説」の有部的特徴に関して、特に同時的因果関係の面から論じたものである。従って、「四縁説」と「六因説」の成立過程の詳細に関しては拙論(1)、(2)に譲るとして、ここではそれら二つの拙論の中で充分に論じ得なかつた点の二・三を補筆しておきたい。

先ず、これら「四縁説」と「六因説」の成立の問題を取扱う際の資料的限界に関してである。有部の「四縁」・「六因」の両説はほぼ『婆沙論』までに完成している。従って、その成立過程を問題とするには『婆沙論』以前の論書が直接的な資料となる。いわゆる「六足・発智」と言われる七論書である。しかし、これら一部のサンスクリットの断片と『施設論』のチベット訳を除いてすべて漢訳としてしか現存していない。そして、当該成立問題に

関しては現存のサンスクリット断片や『施設論』は内容的にはほとんど直接的な資料とはなり得ない。また、現存する漢訳にしてもほとんどが玄奘訳である。すなわち『施設論』を除く『集異門足論』、『法蘊足論』、『識身足論』、『界身足論』は玄奘訳のみであり、『品類足論』、『発智論』、『婆沙論』には別な漢訳も現存しているが、主となるものは玄奘訳である。ところで、すでにこれら三論書に関して玄奘訳と他訳のかなり詳細な比較研究がなされているが（西義雄『大蔵経索引』第十四卷毘曇部(4)解題など）、それによると、それぞれに関してテキスト自体が相当異っているようであり、増広などテキスト自体の変遷が充分に考え得るように思われる。そして、このことは玄奘訳のみしか現存していない他の四つの論書に関しても充分にあり得ることであろう。しかも、玄奘という有部の理論に精通した学僧が単独で一連の有部論書を翻訳する場合、補足説明的な要素が附加される可能性もある。しかし、これらのことを批判的に検討する手段は現在のところほとんど我々には与えられていない。

以上のような資料的限界は、一般に、教説などの成立問題を論じる場合には致命的なものともなり得る。しかし、幸いなことに、「四縁」や「六因」に関して資料となる個所はその論書の中で基本的な論述部分或いは他の訳や他の論書においても確認される部分であることから、その資料的価値は是認され得ると思われる。ただ、これら諸論書には前述の如き資料的限界があることに留意しておくことは必要であろう。

「四縁説」も「六因説」も共に識(心)の生起に対する因果関

係の分析をその発端としているが、後者が前者の中の「因縁」をさらに詳細に分析することによって起こってきたということは、両説の基本的性格を決定づけている。阿含以来、識の生起の条件が認識論的な面から分析されており、「四縁説」はその伝統の中で生じたものである。その際、四縁中の「因縁」の意味には充分に注意を払う必要がある。増上縁はその原義が感官(根)と考えられるから、それと所縁縁と等無間縁の三縁は識の種類(眼識など)を決定したり識の生起のための単なる条件に過ぎない。それに対して、「因縁」は識の生起の最も直接的な親しい縁であるが、これは具体的には識の性格(善・不善・無記)を決定する縁と考えられる。そして仏教で最も重視されるのは識の種類などではなく、識の性格であり、因果関係の上でも当然その面での分析が重視されてくる。この傾向が三世実有説という有部独特の思想の中で増進されて「六因説」が現われてくる。その際、増上縁(果なる自らを除いた他の一切の法を内容とする)と同義である能作因が加えられたことは注意されるべきである。このことは、「四縁説」において増上縁の内容が果なる自らを除いた一切法にまで拡大されたことも通じる。一般に因果関係を広範に考えるのは仏教的特徴ではあるが、有部が増上縁や能作因という特別なものを考えざるを得なかったのは、有部思想の必然の結果である。有部の法の理論は三世実有説を基に構成されている。従って、有部が因果関係を実体なる法の間の関係と理解する場合、三世に亘る一切の法が因果論の対象に入ってくるのである。